

JIA 活動調査報告

中国華南地方ハンセン病快復村での学生ワークキャンプの 質的影響調査報告書

【最終版】

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター

助教 西尾 雄志

序章 本調査の目的

第一章 ワークキャンプがもたらす質的变化

第一節 ワークキャンプとは

第二節 調査方法

第三節 ワークキャンプがもたらす質的变化（1）キャンプ関連職業

第四節 ワークキャンプがもたらす質的变化（2）快復村周辺住民

第五節 ワークキャンプがもたらす質的变化（3）メディアの影響

第六節 ワークキャンプがもたらす質的变化（4）里帰り

第七節 ワークキャンプがもたらす質的变化（5）ハンセン病快復者子弟の状況

第八節 ワークキャンプのもたらす質的变化（6）当事者

第九節 ワークキャンプのもたらす質的变化まとめ—エンパワーメントの観点から

第二章 JIA の活動拡大の手法・プロセスとその背景

第一節 活動拡大の手法

第二節 現地ボランティアのやる気を生み出す工夫

第三節 中国の学生の置かれている経済社会的背景

第三章 関連団体からのヒアリング

第一節 JIA に対する評価ポイント(1)運営の透明性、民主的運営

第二節 JIA に対する評価ポイント(2)受益者に対する敬意と Self Learning Process

第三節 JIA の今後に関するアドバイス

最後に

序章 本調査の目的

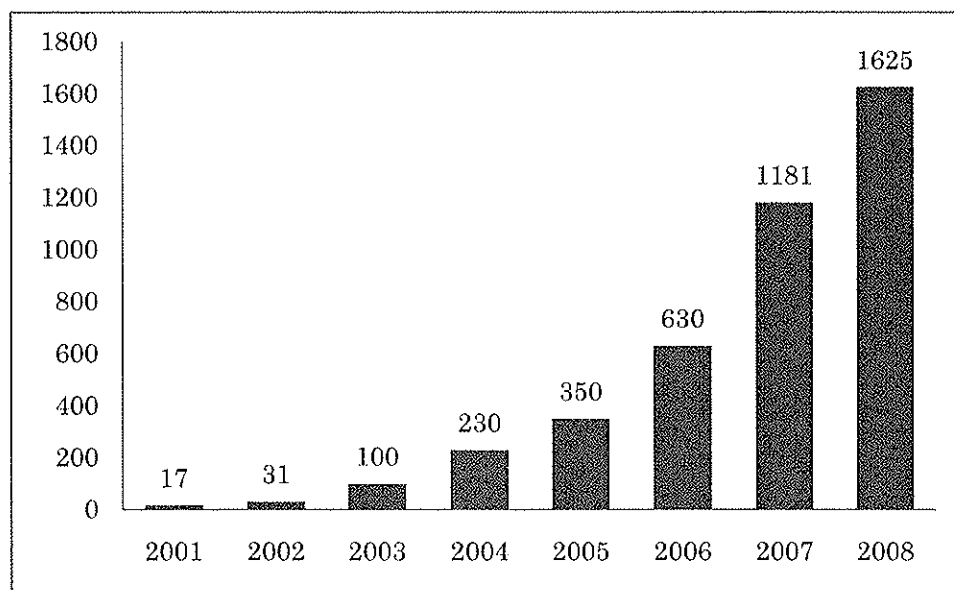
今日、ハンセン病は治療法が確立され、治療薬も無料で配布されるなどの対策がなされたおかげで、この病は公衆衛生上の問題として世界的に制圧される傾向にある。

日本でのハンセン病をめぐる議論は、近代初期からの強制隔離政策を問題にしたものが主流である。しかし、日本近現代史という 100 年のスパンではなく、この病の起源を踏まえ、1000 年単位でこの病を考えるならば、現在実現しようとしているハンセン病の制圧とは、「人類悲願の達成」と表現しても決して誇張ではない。しかしながらそれは、あくまで「疾患」としてのハンセン病を考えた場合のものであって、ハンセン病に対する人びとの意識、つまり差別や偏見の問題を考えた場合、人類は真の意味でハンセン病を克服していない。その現状の中、ハンセン病が制圧されるにともなって、この病が人びとの意識から遠のいていくということは、人類共通のハンセン病に対する迫害の歴史、人権侵害の歴史に対する忘却の始まりにもなりかねない。

それゆえ、「ハンセン病の根絶ないしはハンセン病のない世界」だけを目指すのではなく、「ハンセン病による医療的または社会的問題のない世界」(湯浅 2002)をも目指すことが重要となろう。

一方で、2001 年から始まった中国ハンセン病快復村でのワークキャンプ活動(合宿型労働奉仕ボランティア)は、日本人と韓国の学生らによって開始された。当初、地元中国人の学生の参加は皆無であったが、NGO「家-JIA」(以下、JIA と表記)が設立されたのを機に、中国人のワークキャンプ参加学生の数は右肩上がりに上昇し、2008 年には参加者総数 1625 名の内、9 割以上が中国人学生となった。

表 1) 中国ハンセン病快復村でのワークキャンプ参加人数の年別推移



Social Change in South China 「ハンセン病と尊厳快復」(於 ASEAN 事務局、ジャカルタ)での原田報告資料より転載

このようにハンセン病快復村でのワークキャンプは中国国内に土着化するだけでなく、中国以外にも波及する気配をも見せている。つまり、中国国内にとどまらず、インドネシア、インド、エジプト諸国におけるハンセン病関連施設でのワークキャンプ実施を探ろうとする動きが、この活動に参加した学生から生まれている。

ただ、この活動に関する調査研究は十分とはいいがたく、その可能性は、あくまで示唆的なものにとどまる。この活動を客観的に評価し、その可能性を明らかにすることが、本調査の目的である。

本調査報告書では、中国以外のアジア諸国にこのワークキャンプ活動が紹介される際の参考となるよう、1. ワークキャンプが快復村、もしくは快復村周辺住民にもたらす質的变化、2. JIA の活動拡大の手法・プロセスとその背景、3. 関連団体からのヒアリング、の三点を中心にまとめた。

第一章 ワークキャンプがもたらす質的变化

ワークキャンプとは

ワークキャンプとは、第一次大戦後にキリスト教フレンズ派(クェーカーとも呼ばれる)によって開始された活動であり、日本にはアメリカフレンズ奉仕団によって、大正時代の関東大震災時にもたらされ、第二次世界大戦後に本格的に土着化した。

今日でもさまざまな NGO によって、世界各国でワークキャンプは実施されているほか、近年は大学が教育の一環としてこの活動を導入する動きもある。

ワークキャンプは、一般的に社会問題のある地域に出かけ、そこで一定期間(短いものは週末数日、長いものは数か月、一般的には 2 週間程度)泊まり込み、土木作業などの労働奉仕を行う活動である。日本では、「合宿型ボランティア」もしくは「労働奉仕型ボランティア」などと説明されることが多い。

紙幅の関係上、ワークキャンプに関する詳しい説明は割愛するが、本調査にあたって、重要となると思われるワークキャンプの特徴に関して説明するなら、下のようになろう。

一目すればわかるとおり、ワークキャンプとは、2つの言葉「ワーク(work)」と「キャンプ(camp)」の合成語である。直訳すればそれは、Work(=労働)と Camp(=野営・共同生活)であり、ワークキャンプには、この2つの要素が存在する。

そのそれぞれが、もたらす直接的なアウトプットと、将来的なアウトプット、その究極の目的を表のように整理すると、本調査の意味を理解する上で参考になると思われる。

つまり、労働奉仕によってもたらされるのが、トイレや台所など生活設備など、物的なものであるのに対して、キャンプ、つまり共同生活によってもたらされるものは、いわば「一緒に釜の飯を食べた仲間」と表現できるような、情緒的な人間関係である。

本調査は、JIA のコーディネートするワークキャンプ活動のもつ「非物質的変化」を調査

するものである。それゆえ、ワークキャンプのもつ 2 つの要素のうち、キャンプ、つまり共同生活(同じ屋根の下、当番制の食事準備、大部屋での雑魚寝生活)がもたらす、「情緒的な人間関係」に着目する必要があると思われる。JIA の活動のテーマがハンセン病問題のどくに、差別・偏見の問題であることを考えるなら、ワークキャンプのもつ 2 つの要素のうち、後者の要素に着目する必要があるだろう。

表 2) ワークキャンプの 2 つの要素

	ワーク	キャンプ
直訳	労働	野営、合宿
つまり	肉体労働	共同生活
簡単に言うと	ものを作る	仲良くなる
そこからもたらされるもの	トイレ、台所、舗装道路など	人間的なつながり
究極的目標	充実した生活環境	差別、偏見のない人間関係
端的に言えば	「物的」豊かさを追求	「質的」豊かさを追求

調査方法

ワークキャンプのもたらす「質的变化」を調査する際、中心となるテーマは、ハンセン病に対する差別・偏見問題となる。その際、どのような調査を行ない、どのような結果をもって変化を示すのかが、非常に難しい。本調査でも、それは大いに調査者を悩ませた問題であり、調査実施段階においても、試行錯誤を繰り返すこととなった。

効果を説得的に語るためには、どうしても数的データが必要との思いから、下のようなアンケートを、快復村住人に対して実験的に行なった。

表 3) 質問項目試案

ワークキャンプによって	
親族からの電話連絡が、	(増えた／変わらない／減った)
親族の訪問回数が、	(増えた／変わらない／減った)
自身が故郷へ帰る機会が、	(増えた／変わらない／減った)
村の外へ出る機会が、	(増えた／変わらない／減った)
村の外に出た時に、不快な思いをすることが、	(増えた／変わらない／減った)
周辺住民が、快復村に来る回数が、	(増えた／変わらない／減った)

しかし、差別・偏見の問題としてハンセン病問題を考えるなら、その差別・偏見とはさまざまな事情が絡み合っているものだけに、以上のような質問とそれに対する回答のみで理解しようとするのは、どうしても無理がある。

家族関係も、近隣住民との関係も、自己意識も、きわめて複合的に形成されるものであ

ろう。ワークキャンプによって、それが変化している兆候がたとえ、皮膚感覚的に確信できたとしても、それを単線的に、「キャンプによってこうかわった」と説明するのは、説得力を欠くものとなってしまおうと思われた。

それゆえ、本調査では、ワークキャンプがもたらす質的な変化を、数値で測るのではなく、さまざまな事例を通して示そうと試みた。

JIAの一年あたりの参加者数は1600名にのぼる。ワークキャンプの「キャンプ」の側面に注目するならば、1年で1600ケースに及ぶ「人間的つながり」が形成されているはずである。そこには、それぞれの、ドラマ、人生の物語があるはずであり、本調査では、そのなかでも象徴的な事例を拾い集め、ワークキャンプの質的影響を「シンボリックに語る」ことを試みた。なお、今回調査を行なったハンセン病快復村は別表のとおりであり、調査者はシャードゥーシー村以外の村全てを訪れた。シャードゥーシー村には、「家・JIA」元インターンで、シャードゥーシー村でのワークキャンプ参加経験をもつ菅野真子に調査を依頼した。

それとは別に、上に述べた質問に対する回答も、参考資料として、巻末に収録した。この調査に関しては、事前に調査項目をワークキャンプに参加する中国人学生に伝え、中国人に行なってもらった。

表 4) 調査対象村とその特色

快復村名 (読み)	所在省 所在市	中国側キャンプ実施団体 日本側キャンプ実施団体	活動開始時期	活動の特色
藤橋村 (トンチャオ)	広東省 高州市	JIA 広州地区委員会 チャオ	2004年2月	快復村近隣高校での啓発活動、同高校の快復村訪問
嶺后村 (リンホウ)	広東省 潮州市	JIA 広州委員会 FIWC 関東委員会	2002年11月	日本人一年滞在
平山村 (ピンシャン)	広西チワン族 自治区	JIA 桂林地区委員会 FIWC 九州委員会	2004年2月	学生による里帰り事業
禾庫村 (ヘク)	湖南省 吉首市	JIA Yichan 委員会 FIWC 関西委員会	2007年2月	BUT(JIA OB,OG会)による快復者子弟奨学金事業
沙渡溪村 (シャドゥーシー)	湖南省 吉首市	JIA 吉首委員会 チャオ	2007年8月	

ワークキャンプがもたらす質的変容 (1) キャンプ関連職業

ワークキャンプがハンセン病快復村にもたらす質的変化を見てみると、変化している内容も時間とともに推移している様子が伺われる。このような変化は、キャンプ開催期間が比較的長い、リンホウ村、トンチャオ村、ピンシャン村などで観察できる。

キャンプ開始初期の段階で最初に変化が起きるのは、ハンセン病快復村周辺の町のバイ

クタクシーのドライバーである。快復村周辺に暮らす住民のうち、ハンセン病に関して正しい知識を有しているもの、もしくは、快復村に実際に訪れた経験のあるものは、きわめて少数である。

学生らが、ワークキャンプの目的で快復村へ行こうとしても、その立地上の問題から、公共の交通機関を利用して行くことはできないので、ドライバーとともに車をハイヤーするか、もしくはバイクタクシーを利用することになる。最初のうちは、ハンセン病に対する悪いイメージから、ハンセン病快復村に行くことに抵抗を示すドライバーも少なくない。リンハウ村周辺地域にいたあるバイクタクシードライバーによれば、出稼ぎの、つまり、よその地域から来たドライバーほど、その抵抗感が強いという。

ドライバーたちは、抵抗を示しつつも快復村に行くことになり、そこで学生らと快復者の交流の様子を自分の目で見ることになる。その体験は、ハンセン病に対するイメージを変えるおおきなきっかけとなっているようである。リンハウ周辺のあるバイクタクシードライバーは次のように語った。

「7歳か、8歳のころ、リンハウ村の近くにまでは行ったことがある。だけどリンハウ村の中には、それまで入ったことがなかった。学生がリンハウ村まで行ってくれ、って言ったときは、何でだろうと思ったよ。大丈夫かな、っていうためらいもあった。けど学生たちは、村の人たちと仲良くしてる様子だし、大丈夫なんだな、って思ったよ。今ではリンハウ村へ学生を迎えに行き、帰り支度に学生が手間取ってる時は、リンハウ村の人と一緒にお茶を飲んで待ってるよ。今じゃ、町でバイクタクにリンハウっていえば、みんな知ってるよ」

キャンプが継続されると、キャンプ以外でも、休日を利用して快復村を訪問する学生が増えてくる。その際、キャンプを継続して行なっている快復村周辺には必ず、キャンパーお得意のドライバーがいるようである。彼らドライバーが快復村に行くのは、ボランティアとしてではなく、仕事としてである。同様の理由で快復村と関係をもつ職業はこのようなドライバー以外に、ワークキャンプの建設指導を請け負う建設業者や、アルコールなどを配達する商店の配達人である。彼らは仕事上の思わぬ事情により、ハンセン病村での学生らの活動を知り、それを通してハンセン病を知り、比較的自然的な様子で、ハンセン病に対する悪いイメージを変えていっているようである。

ワークキャンプがもたらす質的変容（2）快復村周辺住民

当初ワークキャンプがもたらす質的な変化、ハンセン病に関するイメージの変化は、ワークキャンプに密接に関係する職業の人びとのあいだにみられる。その次の段階で変化が見られるのは、主に、快復村周辺の市場の人びとであろう。この点に関しては、笹川記念保健協力財団「世界のハンセン病」24頁にも記載されているとおりである。

またこの他にも、意外なかたちで影響を与えているものが、キャンプを記念して作られるオリジナルTシャツである。ワークキャンプ中、学生らはよく、そのTシャツを着て出

かける。その T シャツを着ている若者を市場の人が見ることで、ハンセン病村でのワークキャンプ活動の認知につながっているようである。この T シャツを見て、買い物をする学生におまけしてくれた事例がトンチャオ村には見られた。

またトンチャオ村ではこれにとどまらず、学生らが快復村周辺にある高校で、ワークキャンプのプレゼンを行なうことで、高校生らがトンチャオ村を来訪するケースもでてくるようになった。

これらに見られるように、ワークキャンプがもたらす質的変化は、ワークキャンプに仕事としてかわることとなった人びと(タクシー運転手、建築業者など)を始まりに、快復村周辺市場にて、学生らを直接見ることにある人びとに広がっている。ここまではいわば、直接目の見える接触であるが、次の段階によって、直接接触の範囲を超えて、質的変化が起きるようになる。

ワークキャンプがもたらす質的変容 (3) メディアの影響

リンホウ村の調査へ行く途中、リンホウ村のある潮州市の市街地で、調査に協力してくれた原田燎太郎、蔡潔珊夫婦とその子とで、屋台で夕食をとっていた。すると店の人が蔡に向かって気さくに話しかけていた。内容は次のようなものだった。

「あんだ、テレビで見たよ！ リンホウちゃん、大きくなったねえ」

その後、リンホウ村ではなく、そこからバスで 12 時間以上はなれたところにあるトンチャオ村で、村の人から次のように聞かれた。

「あのお前の友達の原田ってのは、元気にやってるか」

数年前、一度だけ原田がトンチャオ村に来たことを思い出し、記憶力のいい人だと思いながら、元気だと伝えると、さらに村人は次のように言った。

「リンホウちゃんはどうだ。元気に育ってるのか」

数年前に一度だけ原田がこの村に来たときは、娘のリンホウはまだ生まれてなかった。不思議に思って聞いてみると、「テレビで見て知ったんだ」とその村人は教えてくれた。潮州の屋台の人も、そこから 12 時間以上もかかる距離に暮らす快復村の住民も、原田が特集されたテレビ番組を見ていたようである。

このことを通して、メディアの影響力を強く感じた。メディアの影響は、原田が特集された番組以外にも、ワークキャンプのもたらす質的変化に影響を与えている。

キャンプが開催されて数年立つと、地方紙や地方局が、ワークキャンプの様子を報道するようになる。手元の資料によると、ピンシャン村では地方局による報道が 3 回、トンチャオ村では地方紙での報道が 4 回、大学広報誌での報道が 1 回なされている。最もワークキャンプの歴史が古いリンホウ村では、それ以上の数の報道がなされている。

これらの報道により、近隣の人びとの間で快復村の認知が高まり、次のような変化が起きているという。

・当局者の訪問(トンチャオ)

- ・ローカルボランティアからの支援(ピンシャン村、リンホウ村)
- ・職業歌劇団による公演(ピンシャン村)

このように、ワークキャンプがもたらす質的変化は、最初、キャンプ参加学生を直接見聞きできる範囲から、メディアの影響を経て、ワークキャンプを直接見聞きしない範囲まで広がっていく。

さて、以上に見たワークキャンプがもたらす変容は、ハンセン病問題に直接関係のない人びとに対してもたらされる影響である。次に、ハンセン病当事者にとってもっとも重要な人びとに対する影響に関してみてみたい。

ワークキャンプがもたらす質的変容（４）里帰り

ハンセン病問題にとって、もっとも難しい問題が家族との関係であることはよく指摘される。厳しい病気であればあるほど、その困難を乗り越えるために家族が協力し、「●●病家族の会」などの自助グループが結成される。しかしこれだけ多くのハンセン病支援団体がある日本で、いまだにハンセン病の家族会がほとんど存在しないのは、ハンセン病問題における家族問題の難しさを象徴的に示している。

そう考えると、広西チワン族自治区で実施されている、学生らの手による学生同伴の里帰り事業は、特筆に値するものであろう。

里帰りは、広西チワン族自治区に位置する快復村、ピンシャン村で行なわれた。最初に行なったのは、李栄輝（ロンホイ）という青年だった。

彼がピンシャン村の村人ひとりひとりに、故郷に帰りたいか聞いた時、「帰りたい」と答えた村人は一人もいなかったという。村の人との信頼関係なしにはなしえないことだと感じた彼は、まず手始めに、実現しやすそうな人を選んだ。実現しやすい人とは、これまでも家族との関係が良好で、なおかつ、実際に里帰りをしていたが、近年、年をとって体の自由がなかなかきかなくなってきたために、故郷に帰ることができない人だった。これらの人びとにとっては、学生が同伴し、移動時にいろいろ面倒さえ見れば、比較的たやすく里帰りは実現するように思われたからだ。その際、単に学生同伴で里帰りするだけでなく、その様子をビデオカメラにおさめ、それを他の村人にも伝え、自分も帰りたいと声を上げてくれることを期待した。このもくろみで2006年10月に学生同伴の最初の里帰りが実現し、現在10名程度の村人の里帰りが実現している。

彼はすでに大学を卒業し、現在は広州で働いているが、この活動は後輩に引きつがれ、下の点に注意しながら、里帰りを行なっているという。

1. 村人の実家の人との信頼関係をつくる
2. 実家の人に対してハンセン病に対する正しい医学的知識を提供し、ハンセン病に対する迷信をなくす。
3. 学生同伴で里帰りすることにより、お客さんをもてなす中国文化を利用して里帰りを実現させる

4. 里帰りを実施する前に十分な準備を行い、村人、実家の情報をできるだけ詳しく収集する。
集める情報は下の通りであるが、たくさんの情報を集める工夫として、筆記具をもって調査するのではなく、農作業を手伝った休憩時間や、村人の衣類の洗濯など身の回りの世話をするかたわら世間話をするなかで情報を集める。

集める情報

村人自身の情報：

趣味(キャンパーと村人が打ち解けるため、帰郷時の話題を盛り上げるため)、スキル(帰郷後に自立生活が可能かどうか)、過去の帰郷状況、家族との関係、言語、民族、戸籍の有無など

村人の健康状況：

ウラキズの程度、歩行の程度、その他の疾病、精神状態、乗り物酔いの程度(重要)

家族の情報：

氏名、続柄、職業、年代、村人との連絡状況、現住所、連絡方法、使用言語、村人に対する思い

また、実行可能性を高めるため、里帰りのいくつかのパターンを用意する。上から実施が難しいケース。下に行くごとに実施しやすいケースとなる

1. 実家に帰り、故郷で生活する
2. 実家に数日滞在する
3. 実家の家族のほうから、快復村を訪ねてくる
4. 実家の家族のビデオレターを撮影してくる
5. 実家の家族に手紙を書いてもらい、それを届ける。

冒頭でも述べたとおり、家族問題はハンセン病問題の中でもっとも難しい問題である。そのため、それに取り組む学生にとっても、うまく進むことよりも、うまくいかないことのほうが多く、無力感を感じることも多いという。話をしてくれた学生である羅蘭は最後にこんな話をしてくれた。

あるおばあさんがいた。鐘ばあさんといった。最初は里帰りしたいと言っていなかった鐘ばあさんが、里帰りしたいと言い出した。いろいろ考えてみて、鐘ばあさんの弟か、もしくはお孫さんを、快復村に連れてくることのできるのではないかと考えた。それが無理な場合は、弟さんとお孫さんの写真、もしくはビデオを撮ってくることにした。これを2009年8月のワークキャンプで実施しようと考えた。しかしそのワークキャンプが実施される前日に、鐘ばあさんは亡くなった。結局、弟さんが村を訪れることもなくなった。

「鐘ばあちゃんは、自分の死期を感じていたから、家族と会いたいわって言い出したのかもしれない」

羅蘭は、そう回想する。キャンプ中、羅蘭は鐘ばあさんのお墓の前で、こう語りかけたという。

鐘ばあちゃん、
おばあちゃんのお墓の前で、
村人たちにとっての里帰りの意味を、いま、
改めて感じています。

また、李榮輝（ロンホイ）の手を借りて里帰りを果たした村人は、里帰りを終えて、次のように語ったという。

「思ってもみなかったことが3つ起きた」

ひとつは、生きて家に帰れたこと。

もうひとつは、今みたいな幸せがやってくるということ。

そして最後に、世の中が天地がひっくり返るくらい変わるということ。

ワークキャンプがもたらす質的変容（5）快復者子弟の状況

ハンセン病に対する差別・偏見は、病気を病んだ当事者だけでなく、その家族にまで及ぶ。日本でも患者数が多かった時期は、若年の患者の子弟に対する差別が厳しく、黒髪小事件などは有名である。しかし今日の日本では、ハンセン病を新たに発症する人もほとんどおらず、そもそも発症しても隔離政策はとられていないため、ハンセン病快復者子弟の就学問題などは、過去のイメージが強い。

しかし中国においては、中央政府から離れた地域では、ハンセン病政策が浸透しなかったことなどが理由で、2009年時点でも、ハンセン病快復村に暮らす快復者子弟の就学問題が存在する。ここでは、ワークキャンプとの関係でひとつの事例を紹介したい。

広東省西部のハンセン病快復村を2006年2月、小牧義美(星塚敬愛園)が訪問した。そこで二人の少女に出会う。年齢は女子高生の世代。二人とも、ハンセン病快復村に暮らす。朝の時間帯、二人の少女のうち一人アヨンは、バイクの後ろに乗せてもらい、高校へ通学するところだという。それを見送るもう一人の少女。その少女アピンは通学する様子もなく、快復村に暮らす体の不自由な母の世話をしていた。その風景を小牧は静かに見ていた。

数日後、アピンは、JIA代表の原田に電話した。

「勉強したいの」

アピンは小さな声でそういった。アヨンのほうは、奨学金を得て高校に通っている。アピンも奨学金を得ようと手を尽くしたが結局奨学金は得られなかった。その話を小牧も聞くことになる。自身も病気が理由で学校に行けなかった経験を持つ小牧は、その少女の学費を支弁し、そのおかげで、少女は高校へ行くようになり、アヨンと二人授業を受けるよ

うになった。

2009年に高校を卒業した二人の少女は、広東省西部にあるハンセン病快復村を出て、中国南部最大の都市である広州に引っ越す。経済的事情の厳しい中国のハンセン病快復村の子弟にとって、村を出ることは経済的にきわめて難しい。しかし、このケースでは下のような事情があった。

この快復村では、2004年2月より、ワークキャンプが開催されていた。そのワークキャンプに参加した学生が、卒業後に広州の自動車関連企業に就職。その傍ら、ネット販売のサイドビジネスを始める。その一方でこの学生は、アヨンと交際をしており、そのサイドビジネスを手伝う条件で、二人を広州に呼び寄せた。

その後、2009年8月、小牧はJIA ネットワーク会議出席のため、中国広西チワン族自治区を訪問。広東省広州市から、広西チワン族自治区まで車いすで移動する小牧の介助を、この二人の少女が引き受けた。そこで小牧は、以前から思っていた大学進学を二人に勧めた。その際の学費も小牧が支弁すると伝えたが、二人の少女は、進学を希望せず、広州で働きたいと言った。

二人を呼び寄せた若者は、英語と日本語を話すことができる。仕事のかたわら、この若者から語学を学びたいという。快復村という閉鎖的な環境で育った彼女らが、ワークキャンプで学生たちに出会い、異国からの若者にも出会い、外の世界に大きな魅力を感じたことは容易に想像できる。その際のツールとして、語学の習得に大きな関心を抱くこともまた同様である。彼女らは熱心に説得しようとする小牧の申し出を断り、広州での生活を始めた。広州で生活するだけでなく、JIAの活動を支える卒業生の集まり BUT(Buck Up Team)の会員になることも決め、彼女ら自身がJIAの活動を支える側になるという¹。

現在、BUTはさまざまなかたちでJIAの活動を支援しているが、そのなかのひとつが、快復村に暮らす快復者子弟の奨学金事業である。その担当となっている人物が、2009年のJIA ネットワーク会議で次のようにスピーチした。

(ハンセン病快復)村にいる子供の成長は、村人全員の希望であり、夢だ。

その子供が、肉親の病気が理由で、学校に行けないようなことはあってはならない。

だから僕はバックアップチームの奨学金事業を担当しているんだ。

このスピーチを直接聞いていた小牧は、その場で10万円の寄付を申し出、次のように語った。

私は一枚の卒業証書も持っていません。

¹ その後、状況が変化したようである。アヨンは広州滞在を続けるが、仕事は洋服関係の仕事に変えたようである。アピンは理由不明だが、2009年11月現在、シンセン在住。快復村関係者の紹介でシンセンで仕事を見つけたとのことである。本稿執筆までに、その変更の理由を確認できなかった。

ハンセン病にかかって、強制的に隔離されたからです。

でも、勉強したいといつも思っていました。

療養所のなかで時間はあっても、悲観的になってしまい、何もできないでいました。

私がした思いを、村の子供たちにさせたくない、

その思いで、カンパします。

有効に使って頂けたらありがたいです。

ワークキャンプのもたらす質的变化（6）当事者

最後にもっとも重要な観点として、ワークキャンプが、ハンセン病問題の当事者である快復者にもたらす質的变化をみていきたい。

シャードゥーシー村では、当初学生らに対して非常に非社会的だった村人が、ワークキャンプを重ねるうちに、学生に対してセキを切ったように喋りだし、止まらなくなったケースが報告されている。

またピンシャン村では、キャンプ開始当初、自分の曲がった指をにぎる学生を見て「お前、怖くないのか」と聞いていた村人も、徐々にそういうことも言わなくなっていったという。ワークキャンプや、キャンプ以外でも村を訪れる学生に対して話す内容も、「おお、また、よく来たな」といった日常的な会話に変わっていったという。

快復村に暮らす人びとは隔離されていたため、非常に狭く限定された世界で生きることを余儀なくされた。彼らにとって、快復村の外の世界のイメージは、自分が隔離される前に味わった、ハンセン病に対する差別、偏見がもっとも激しかった時期のそれであることは容易に想像できる。

それ故、快復村の中に引きこもり、程度の差こそあれ、多くの快復者は、心を閉ざしてひっそりと生きている。それは言ってみれば、自分に自信をもてない「うつむいて生きている」状態とも言えるかも知れない。それが、自分に握手する人に対して「怖くないのか」とたずねてしまう態度につながっているのではないか。

しかしワークキャンプで学生たちと交流するうちに、この意識や態度が変わっていつている。怖がる様子、嫌がる様子を見せない学生の態度を見て、ハンセンに対する扱いが変わっていつていることを初めて知り、それによって意識や態度に変化が現れる。

ピンシャン村のある村人の話は、次のように語った。

「人が自分のことを怖がるのも、無理ないと思う。だけど、自分はあなたのことを怖いと思っていないよ、ということ態度でも示してくれると一番助かる」

ワークキャンプのもたらす質的变化まとめ—エンパワーメントの観点から

以上のように、ワークキャンプがもたらす質的变化を踏まえた上で、その変化を、エンパワーメントの観点から考えてみると、何が見えてくるだろうか。

エンパワーメントとは、おもに福祉における対人援助の分野で使われ始めた概念だが、

福祉以外の分野、つまり第三世界の開発分野などでも使われている。その意味は、「何らかの理由によって力を剥奪されている人が力を獲得すること」とされる。具体的には、社会のなかで周辺に追いやられている障がい者やマイノリティが、さまざまな方法で社会的な力を得ていくことを重視する考え方である。

その際、エンパワーメントの考え方では、社会の周辺に追いやられている人びとの意識にも関心を払う。問題なのは社会の周辺に追いやられているという社会状況だけにとどまらず、そういった状況を「仕方のない状況」としてあきらめ、受け入れてしまっている点であるとする。つまり、問題は周辺の追いやられているその人本人の意識にもあると考える。それゆえエンパワーメントの考え方では、「人々が宿命として受け取っている被抑圧の状況を客観視し、それを主体的に変革可能なものとして批判的に認識していく過程」(成富1998)であるところの「意識化」を重視する。そしてそこにおける援助者の役割とは、そのような被抑圧者の主体性を引き出すところにあるとされる。

先にあげた村人の言葉にしみじみもあらわれているように、快復村に暮らす人びとは、「人が自分のことを怖がるのも、無理ないと思う」として、ハンセン病に対する差別や偏見があることを、運命、もしくは仕方のないこととして、受け入れている。それに対して学生キャンパーの彼らに対する態度、つまり、怖がったり、嫌がったりしない態度を肌で感じ、その運命として内面化している被抑圧的な状況認識を変えつつある。

ただ、「被抑圧の状況を客観視し、それを主体的に変革可能なものとして批判的に認識していく」その度合い、つまりそこに見られる主体性のあり方には、快復者の中でも強弱があるのは事実であろう。日本の例でいえば小牧義美(鹿児島敬愛園)や、中国でいえば歐劍鏡(ヤンカン村)などのように、ワークキャンプをきっかけとして、講演活動を行ったり、みずから積極的にワークキャンプにコミットしたりするなど、大きな主体性を発揮する例はある。

しかしハンセン病問題における当事者の平均年齢を考慮するならば、多くの人びとに、これほどの主体性の発揮を期待するのも現実的ではないだろう。その一方で小さな変化にも目を配るなら、それまで、外部の若者を前に「怖くないのか」とまず確認していた快復者の態度の変化も重要であろう。そのような態度をとっていた快復者が、ワークキャンプを経て「おお、また、よく来たな」と、日常的な会話を学生らと交わすようになることもまた、小さな変化、小さな主体性の発揮ではあるが、それが日常的なものだけに、重要性を秘めているものと思われる。

また、広西チワン族自治区のハンセン病快復村ジャーピン村での次のようなエピソードも示唆的である。その村に暮らす足の不自由な人に対して、現地のNGOから歩行器が提供されていた。しかし、その人はその歩行補助具の使い方がよくわからず、放置していた。しかし、その村でワークキャンプが開催されるようになり、キャンプに参加した学生らはその歩行補助具の使い方をその村人に伝えた。すると、キャンプ終了日にその村人は、学生らに別れの挨拶を伝えるために、その歩行補助具をはじめて使用して学生のもとへ駆け

つけ別れを惜しんだという。これも小さな変化であるが、ワークキャンプが村人にもたらしている確実な変化であるといえるだろう。

第二章 JIA の活動拡大の手法・プロセスと背景

活動拡大の手法

2009年11月現在、JIAの活動地は、華南地方5つの省(広東省、広西チワン族自治区、海南省、湖南省、湖北省)に及び、2008年のワークキャンプ数は83回に及ぶ。ロックフェラーブラザーズファンドの華南地方プログラムディレクターのシェンユー(郭慎宇)によれば、これは「中国のNGOの中でも有数」の規模だという。

これは今回調査を行なううえでも、実感として伝わってきた。たとえば、広西チワン族自治区や湖南省など、華南地方の中心都市広州からかなり離れた地域で調査を行なっても、快復村には必ず学生の姿があった。学生たちはワークキャンプでもない時期に、快復村を訪れ、農作業の手伝いをしたり、村人と一緒にテレビを見たり、村の人びとと自然な付き合いをしていた。村での調査を追い、町に戻ると、地元の学生や、学生時代にワークキャンプに参加した経験のある社会人が自然と集まり、決まって夕食会となった。おおよそ、30名から40名程度の中国の若者が集まってくる。偶然となりに座った中国の学生に、「ここにいるのはみんな君の知り合いなのか」とたずねると、知らない人もいっぱいいる、と言った。このように、ワークキャンプは学生たちの身内の人間関係を越えて、華南地方において土着化している様子であった。

JIAはどのようにしてこのように活動規模を広げてきたのだろうか。その規模拡大のプロセスを聞くと、それはきわめて草の根的なものであった。

まずハンセン病問題を管轄するCDC(Center of Disease Control:疾病予防控制中心)とコンタクトをとる。ここでCDCは省レベルのものである。コンタクトを取る方法は、JIAが漢達康福協会の一セクションであった時代は同協会を通して、JIAが独立してからは、さまざまなコネクションを通してコンタクトを取るという。アポイントを取って、CDCまで出向き担当者にJIAの紹介、ワークキャンプの説明をする。そしてワークキャンプ開催の許可をもらい、市レベルのCDCに対して、省のCDCから指示を出してもらう。キャンプ実施後も、JIAから活動の報告を行っている。

省から市レベルのCDCにワークキャンプの話を通してから、ハンセン病快復村を訪問し、ワークキャンプの説明、村のニーズ調査を行なう。

快復村のニーズ調査の後、次に快復村付近にある大学に向かう。この場合も、大学の事務所に直接コンタクトを取るのではなく、これまでのキャンプ参加者の友だちの友だちをたどって、快復村付近にある大学の学生を紹介してもらう。その学生を通して、大学にワークキャンプ説明プレゼンテーション開催の許可をもらい、また学内の会場を確保し、参加者を募るのだという。

学生ボランティアのやる気を引き出す工夫

自身も学生時代にワークキャンプに参加し、現在、JIAのパートタイムスタッフの王志偉に、ワークキャンプの中国での土着化に関して聞いた。

彼はワークキャンプ活動の土着化に関して、現地の参加者、つまり中国の参加者が「これは自分たちの活動だ」と思うことが重要であるという。実際彼がワークキャンプに参加したころ、彼はワークキャンプを自分たちの活動だと感じてはいなかった。それは、「ワークキャンプ中、すべて韓国側のメンバーが取り仕切っていた」からだという。

それでは、いつ頃から、王自身が、ワークキャンプは自分たち中国人の活動だと思うようになったかたずねると、ワークキャンプのニーズ調査と、キャンプ実施のための資金作りを、中国人がするようになってからだという。そうなるのはじめて、これは自分たち中国人の活動だ、という意識が芽生え始めたという。

JIAの活動が中国華南地方の5省で開催されるまでに広がった要因を、彼は下のような理由だと語る。1つにボランティアに裁量が認められること。2つ目にボランティア自身によってキャンプが運営できたこと、最後に、JIAが各省のワークキャンプを管理的に扱うのではなく、運営を彼らに任せたこと。

また情熱ある学生ボランティアに恵まれたこと、理解あるスポンサーに恵まれたことも幸運であったという。

JIAの運営の一つの特徴は、ボランティア自身に裁量を与え、彼らの自主性を尊重する気風だろう。これはJIAの代表である原田燎太郎のワークキャンプの最初の体験が、FIWC(フレンズ国際ワークキャンプ)の流れをくむものであったことにあると思われる。FIWCの方針の一つに、ボランティアであるキャンパーの自主性を尊重することを端的に示すモットーがある。それは、「多数決原理は採用しない、やりたいやつがやる。やりたくないやつは、やりたいやつの足を引っ張らない。これを基本原則とする」というものがある。

自主性を最大限尊重するということは、別の角度から見れば、自主性と表裏一体の責任もそこに発生するということである。快復村のニーズに沿ったものであったら、何を行ってもいいが、それを実現するための準備をするという責任と、そこで必要となる資金を集める責任を同時に与えていることが、現地の学生のやる気を引き出している要因だと思われる。

中国の若者のおかれている経済社会的背景

ワークキャンプは日本でも、多くのNGOによって国内外を問わず開催されている。しかしながら、ワークキャンプの事例を調べても、特定の社会問題をテーマに掲げ、現地の国で1000名以上の現地参加者を生んでいる事例はほとんど聞かない。その意味では、ワークキャンプの事例においても、JIAのケースは非常に稀なものと言える。その理由を探るためには、ワークキャンプが開催されている国の若者がおかれている社会経済的環境を考慮す

る必要がある。

現在中国では、「90 后」という言葉が話題に上るといふ。その意味は、「90 年代以降生まれ」ということになるが、この世代が現在の中国のワークキャンプ参加者の年代に重なる。

この「90 后」という言葉は、昨今の中国の経済社会的変化を反映して語られているようである。日本でもかつて、それまでの世代とはまったく異なる価値観を持つ世代の台頭を「新人類」と表現したこともあった。また、昨今の大学生の世代、つまり「ゆとり教育」世代を「平成生まれ」と表現して大学教育者が恐れ慄いたりするように、世代間の価値観のギャップに対する戸惑いは、いつの時代にもあるものである。

この「90 后」という言葉を、JIA のパートタイムスタッフである王志偉(84 年代生まれ)は、次のように説明した。

「僕たちの時代は、1 週間の小学生の小遣いが 1 元か 2 元くらい。90 後の小学校の小遣いは、1 日で 10 元。90 後は、外国ブランドのキャンディを食べて育ったが、僕が小さいころは、キャンディという言葉が知らなかった。」

この説明からうかがわれるとおり、「90 后」とは、まず、中国の経済成長の恩恵を受けた「貧しさを知らない世代」を意味している。また、「90 后」が示す意味は、経済的な意味合いにとどまらない。中国では 80 年代生まれまでは、二人までは子どもがもてたので、二人兄弟姉妹が多い。しかし、90 年代生まれは、完全に一人っ子として生まれた世代である。さらに、80 年代生まれの幼少期は、中国都市部でも比較的、地域共同体、コミュニティが残っていた時代であり、近所の年代の異なる子ども同士で遊ぶことも珍しくなかった。しかし、「90 后」の世代になるとその幼少期は、中国都市部の共同体が完全に破壊された時期と重なる。つまり、地域で遊ぶことが少なくなる半面、インターネットの普及により、友だちもネットを通してつくることが珍しくなくなった時代であるという。

王によれば、「90 后」とは、単に経済的な恩恵を享受している世代というより、幼少期におかれた環境から、人とのコミュニケーション能力や、人間関係の作り方に、これまでにない性格をもつ世代であるという。

これらの世代に相当する現在のワークキャンプ参加者と話をしてみて感じるのは、現在の彼らにとって、気を使わなくても済む、ありのままの自分でいられるような場所を、家庭の中にも、大学の中にもうまくもつことができず、いつも息苦しそうに生きている様子である。JIA のスタッフの陳や代表の原田も指摘しているが、ワークキャンプが彼らにとって、ひとつの「居場所」として機能している雰囲気がある。

それを強く感じるのは、よく彼らが口にする次のような言葉の使い方である。彼らは快復村に行くことを、「村に行く」と表現しない。その代わりに、「村に帰る」という表現を多用する。同様に共通するのは、「(村の快復者たちは)自分たちの本当のおじいちゃん、おばあちゃんだ」「快復村は自分にとっての第二の故郷だ」という言葉である。世界的にみても隔離の象徴のようなハンセン病快復村が、「90 后」の世代にとって、「居心地のいい、帰りたい場所」となっている点が、きわめて興味深い。彼らにとって、快復村に行くことは、

日本的な感覚で言うと、お盆休みにおじいちゃん、おばあちゃんの田舎に行く感覚に近いのかもしれない。

またさらに興味深いことに、このような表現をするのは、中国の「90 后」に限らず、日本の学生にも共通していることである。本調査の主旨からは若干それる内容であるが、ある日本のキャンプ参加者は、キャンプの体験を語る際、「こんなに人に心から親切にされたり、自分のことを本当に待っていてくれる人がいることを感じたりしたことは、ワークキャンプが生まれて初めての体験」と表現した。こう語った彼女が、たとえば不遇な家庭環境や経済環境で育った辛い過去を背負っているのなら、このような表現もうなずける。しかし彼女の生い立ちを聞くと、中学校から私立の学校に通い、有名大学を卒業し、現在海外勤務という一見、きわめて華やかなものである。その半生の中で、「親の年収」が友だちとの間で話題になっていた中学時代や、それに対する疑問や居心地の悪さを感じていながら、それをうまく言葉に表現できず、親の描く幸せと自分のもう幸せとのギャップにずっと、悩んでいたという。彼女は海外勤務のかたわら、休みをみつけて、いまもその快復村に通うが、その理由は、そのような半生の中で漠然と感じていた疑問や居心地の悪さと、快復村で過ごす時間との間に、奥深いところで何か関係があるのだと思うと語っていた。

第三章 関連団体からのヒアリング

第一章では、ワークキャンプがもたらす質的变化を、ハンセン病快復村、および周辺住民を中心にみてきた。第二章では、拡大するワークキャンプを JIA という NGO の運営手法や、参加する中国の若者にスポットをあてながら概観した。続く本章では、その活動を外部の関連組織の人の目から幾分、客観的に見ていきたい。

ここでは、外部の関連団体として、JIA に対する資金提供を行なっているロックフェラーブラザーズファンド、中国でハンセン病問題に取り組む漢達康福協会、湖南省疾病予防控制中心の3つの団体にインタビューを行なった。

この三者のうち、魏は医師である自分の立場を踏まえて、JIA の活動を次のように評した。「医師である我々は、患者の病気を治すことはできる。しかし、病気によって傷ついた心までは治すことができない。その心を癒すことを、学生たちは一生懸命にやってくれている」

第一章でたどったワークキャンプのもたらす質的变化も、傷ついた心の問題と密接に関係するものである。魏の指摘には、JIA が活動を通して何をしようとしているのか、その本質を医師の立場から評したものであると言えるだろう。

また、三者のうち、ロックフェラーブラザーズファンドのシェンユー(郭慎宇)が、もっとも体系的に JIA の活動を評価していたので、彼女のインタビューをもとに以下、報告することにしたい。

【インタビュー協力者】

湖南省 疾病予防控制中心 皮膚病ハンセン病防治科 魏中和科長
ロックフェラー・ブライザーズ・ファンド プログラムディレクター シェンユー(郭慎宇・米国籍・NY 在住)
漢達康福協会 事務局長 陳志強

JIA に対する評価点ポイント（１）運営の透明性、民主的運営

シェンユーは、JIA に対する評価として、その運営の民主性をあげた。華南地方の NGO 支援を担当する彼女は、これまで中国の多くの NGO を見てきた。その中でも JIA の運営スタイルは特殊であるという。

たとえば中国の多くの NGO がトップ一人の意見で団体全体が動きがちだが、JIA の場合、代表として原田がスタッフを信頼し、育てている点を評価する。

たとえば、シェンユー氏が原田に用事があるときも、原田は必ずスタッフを同席させる点をあげる。一般的な中国の NGO は、トップだけが対応するのが普通であり、スタッフが同席して、自分の考えを述べる機会を与えられることは少ないという。対照的に JIA の代表である原田は、スタッフ同席の上、何かを話すときも、スタッフに担当をきちんと割り振り、スタッフもきちんと自分の意見、考えを言う。

このような民主的な運営スタイルを保ちながら、非常に早いスピードで活動を中国華南地方に広げている点をシェンユーは評価する。その際、JIA は各地域委員会に裁量権を認め、それにより若者のモチベーションをうまく引き出していると評価する。

若者のモチベーションをうまく高めていることに成功していることに関しては、漢達康福協会の陳志強も評価している。しかし同時に彼は、JIA の活動の拡大を評価する一方で、その拡大があまりに急速すぎると、JIA の理念や精神が伝わらないまま活動が広がっていくことを懸念していた。つまり JIA の目的を理解していないキャンプ参加者が出てくることに注意を促した。また、今後の活動に関しては、長期的なビジョンを明確に示すことの重要性を指摘した。NGO 代表として、ボランティアと直接かかわる機会の多い立場にある人物からの指摘として、非常に説得力のある内容である。

JIA に対する評価点ポイント（２）受益者に対する敬意と Self Learning Process

シェンユーが、JIA の活動を知るにあたって驚いたもののひとつが、JIA が快復村に対して行なうニーズ調査の際に使用するニーズアセスメントフォームの詳しきであったという。その項目の細やかさに、JIA の快復村村人を大切にしている姿勢を感じたという。

一般的な NGO と比較して彼女は次のように評した。つまり、アピールの非常に上手な NGO は多々あるが、よくよく聞いてみると受益者やローカルピープルを見落としていることがよくある。そこに陥っていない点を彼女は評価していた。

もう一点 JIA に対する評価として、彼女は JIA の「self learning process」をあげた。専門用語なのか、調査者には耳慣れない表現であったが、つまり、ひとつの課題にぶつかる

たびに、きちんとそれを乗り越え、そしてその困難の中から多くのものを確実に学びとるプロセスを意味しているようである。

これに関して、JIA 代表の原田は次のように語った。

中国で活動を続けていけば、次から次へと課題が出てくる。一つの課題を解決した後に新たに出てくる課題は、その前の課題より大きなもの。そのなかできちんとコアスタッフを育成していかなければならないが、そのなかで、彼らの夢を見させてあげたい。そのためにも、彼らに海外含めいろんなところに行く機会、いろんな人に会う機会をつくりたい。

JIA の今後に関するアドバイス

これに続いてシェンユーは、JIA に関して次に様なアドバイスを送った。

- ・法人としての政府登録、企業協力をもらう際、法人格が不可欠。
(この点に関して、陳志強は、JIA が、企業登録で法人格を取得することも検討していることに関し、税負担が NGO には大きな負担となることに注意を促した)
- ・このネットワークをどう維持し、発展させていくかが課題。
(この点に関して陳志強は、その際、NGO としての長期的で明確なビジョンをもつこと、ミッションを共有することの重要性を指摘する)
- ・コアスタッフの育成、スタッフの最低限の給与の確保(中国も NGO が増えて、NGO のスタッフの確保が難しくなっている)。
- ・コアスタッフの育成のために、スタッフが他の NGO から学ぶ機会など、外に出る機会を増やしていくことが重要(海外含め)。
- ・資金獲得、中国の特殊事情
NGO の資金獲得に関して中国では、定まったうまいやり方はない。NGO の資金調達是中国の場合、政治と密接に絡む問題であるため、JIA も苦勞している。だが、プレゼンテーションスキルやコミュニケーションスキルは、決して悪くないレベルに JIA は達している。それでも NGO が資金獲得に苦勞するのが中国の現状。
- ・資金調達には、国内、国外のものがあるが、地域レベルの協力関係を構築するのが重要。
- ・組織の透明性に関して、海外からの資金援助をいぶかしがる人もいるので、注意が必要。
- ・RBF は華南地方の環境問題を支援するのが本業だが、JIA の活動には特別感銘を受けたので、中国の市民社会育成という意味合いで支援をしている(非常に稀なケース)。これまで多くの NGO を支援してきたが、JIA は、うまく表現できないが、私の心にもっとも響く活動。私の同僚たちも皆 JIA のファン、JIA の活動大好き。応援している。多くの NGO が学ぶべきものを JIA はもっている。これからもがんばってほしい。

最後に

83 箇所ハンセン病快復村でワークキャンプが開催され、それに 1600 名近くの若者が参加しているということは、非常に多岐にわたる影響や出来事が起きている。

本調査報告では、紙幅の関係から、そのすべてを網羅することができなかった。十分な調査期間、調査資金の提供をいただきながら、そこで見知ったワークキャンプのさまざまな波及的出来事を、報告しつくせなかったのは悔やまれる点である。

しかし、華南地方 5 省の快復村でのワークキャンプの波及効果を網羅しようとするれば、それは単著一冊分くらい、本報告書の 10 倍以上の分量になることもまた事実である。本調査実施にあたり携行した文庫本サイズの取材ノートは、総計 500 ページにも及んだ。

そこで提案したいのは、毎年行なわれる JIA のネットワーク会議における各地域代表の活動報告の文書化である。毎年行なわれるこの会議では、5 省にまたがる各地域委員会の代表が、活動を報告する貴重な機会である。その機会を広く共有するためにも、会議終了後、各地域委員会の発表者に、報告内容を文字におこしてもらい、それを記録としてまとめることは、ワークキャンプのアジア諸国の普及をはかる際、きわめて貴重な参照資料となると思われる。

【文中敬称略】

【引用文献】

成富正信「エンパワーメントの実践理論に向けて」ソシオサイエンス第4号、早稲田大学
社会科学部研究科、1998年。

笹川記念保健協力財団「世界のハンセン病」2007年。

湯浅洋「ハンセン病対策の現在と将来」『ハンセン病学会誌71』2002年。